

熊本県宇土郡不知火町大字高良

# 神の元1号墳

(鬼のいわや古墳)

熊本県文化財調査報告書 第122集

1992年

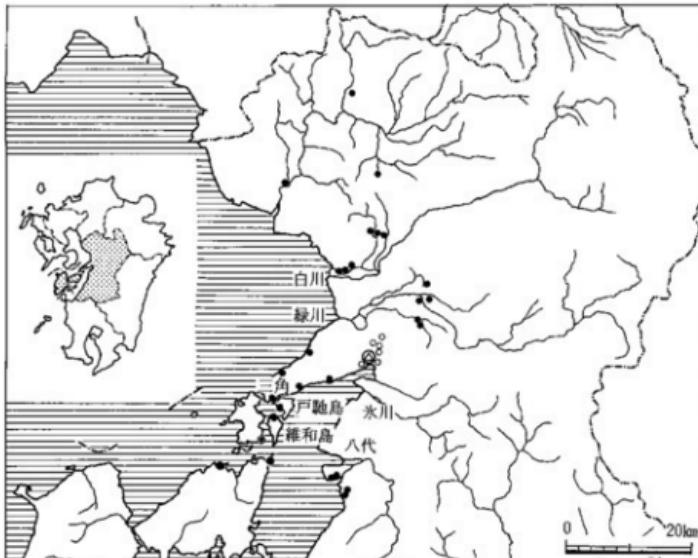
熊本県教育委員会

熊本県宇土郡不知火町大字高良

# 神の元1号墳

(鬼のいわや古墳)

熊本県文化財調査報告書 第122集



1992年

熊本県教育委員会

## 序

不知火町から宇土市にかけての宇土半島基部が、県下でも有数の前方後円墳集中地域であり、特に前期古墳が多く分布していることは周知のことあります。その意味では、この地域が「ひのくに」発祥の最有力候補地ということもでき、これらの前方後円墳をはじめとした遺跡からどのような古代史を再現できるのか、たいへん興味をひかれます。

今回調査しました神の元1号墳は、不知火町大字高良字神の元にありました。近くの塚原という地名が示すようにこの丘陵にはかって多くの古墳があり、なかでも塚原1号墳は船の線刻があることで広く知られています。しかし残念なことに、今までにかなりの数の古墳が破壊・消滅しています。

神の元1号墳もいろいろな事情で現地保存ができませんでした。しかし、不知火町のご尽力により町民がよく利用される不知火町民グラウンド内に移築することができ、さらに不知火町教育委員会・文化財保護委員・地元のかたがたのご協力によって、この高良丘陵と周辺の遺跡分布調査を実施することができましたことは、文化財保護・活用の面で意義深いことと思います。

最後に、調査にご協力をいただきました不知火町教育委員会をはじめ不知火町役場、県農政部農地建設課、県宇城事務所耕地課及び地元の関係者の方々に対し、心から感謝の意を表します。

平成4年3月31日

熊本県教育長 佐 藤 幸 一

## 凡 例

- 1 本書は、宇城北部地区広域營農団地農道整備事業の事前調査として、熊本県教育委員会文化課が1991年3月～7月に実施した神の元1号墳（鬼のいわや古墳）の調査報告書である。
- 2 本書の執筆・編集は、中岡昇が県文化課の人々の助言を得ておこなった。
- 3 遺構実測は調査者全員がおこない、遺物実測は古城史雄・中岡昇がおこなった。
- 4 遺構・遺物のトレースは、中扉を六田育子がおこなったが、その他は木下春千代の手によるものである。
- 5 遺構の写真は山隈誠・古城史雄・中岡昇が撮影し、遺物の写真は中岡昇が撮影した。
- 6 本書で使用したレベルは海拔高度で、方位は磁北である。
- 7 神の元1号墳（鬼のいわや古墳）の出土遺物と記録類の資料は、熊本県文化財収蔵庫に保管されている。
- 8 当古墳の名称を、神の元1号墳（鬼のいわや古墳）とした。  
熊本日日新聞が『「鬼の岩屋」…実は古墳』の見出しで当古墳を報道したこともあり、遺跡発見通知書（1991年2月27日文化庁へ提出）では、当古墳の名称を「鬼のいわや古墳」とした。しかし、地元では塚原1号墳を「おにのいわや」とよんでいるため混乱を生じるおそれが強いこと、また調査の過程ですぐ近くに古墳が1基存在することが判明したので、小字名をとって神の元1号墳とした。本報告書では、遺跡発見通知書との関連もあり「神の元1号墳（鬼のいわや古墳）」としたが、将来は「神の元1号墳」と呼ぶのが適当と考える。

## 本文目次

### 第1章 はじめに

1 発掘調査にいたる経過	1
2 調査の体制	1
3 遺跡の環境	3

### 第2章 調査の記録

1 古墳の遺存状況	7
2 発掘の経過	7
3 石室の築造	10
4 出土遺物	20
5 古墳分布調査	24

### 第3章 調査のまとめ

1 神の元1号墳	25
2 高良古墳群	25
3 宇土半島基部の前期古墳の立地	27

### 第4章 古墳の移築

1 移築にいたる経過	31
2 移築作業	31
3 移築場所・方法	31

## 挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図	4
第2図	遺跡周辺地形図	6
第3図	神の元1号墳調査前現況図	8
第4図	神の元1号墳完掘状態実測図	8
第5図	トレンチ実測図	9
第6図	石室腰石抜去状態実測図	12
第7図	石室完掘状態実測図	13
第8図	石室実測図	15
第9図	奥屍床N0.1仕切石実測図	18
第10図	右屍床断面図	19
第11図	遺物実測図（土器）	21
第12図	遺物実測図（耳環、ガラス小玉）	23
第13図	宇土半島基部主要古墳分布図	26

## 表 目 次

第1表	周辺遺跡地名表	5
第2表	発掘作業進行表	10
第3表	仕切石実測数値表	17

## 図 版 目 次

図版1	航空写真、遺跡遠景写真	37
図版2	調査前遺跡現状写真	38
図版3	トレンチ写真	39
図版4	石室全体、奥屍床、左・右屍床写真	40
図版5	奥壁腰石裏込め石・右壁腰石裏込め石写真	41
図版6	左壁南腰石下込め石、腰石掘り方、遺物出土状況写真	42
図版7	青白色粘土検出状況写真	43
図版8	遺物写真	44
図版9	遺物、左・右袖石写真	45
図版10	石室完掘状態・石室掘り方写真	46
図版11	移築後石室写真	47

# 第1章 はじめに

## 1 発掘調査にいたる経過

神の元1号墳の調査は、熊本県農政部農地建設課が1979年から施工している宇城北部地区広域営農団地農道整備事業にかかわり実施した緊急発掘調査である。

県文化課が当古墳の存在を知ったのは、1989年2月であった。<sup>1)</sup>同年3月、県文化課は現地に係員を派遣し遺跡確認作業をおこなうとともに、県宇城事務所耕地課・不知火町教育委員会・不知火町農政課との4者協議にはいった。協議の結果、路線を変更するには周囲の地形が不向きであること、また古墳は盜掘を受けた上、大きく破壊・削平されて腰石の一部を残すのみという状態であったため、記録保存もやむを得ないという判断に達した。

当古墳所在地の用地買収が1990年12月に終了し、1991年1月に県宇城事務所から調査の依頼が文化課にあった。2月～3月にかけて、発掘調査実施に伴うプレハブ設置場所・堆土場所・古墳移築などにつき4者で協議を重ねた。

県文化課文化財保護主事中岡昇と同課嘱託山隈誠が発掘調査にあたることになり、1991年3月7日から調査を開始した。また、必要により嘱託吉内素子（1990年度）が参加し、1991年度の調査には文化課主事古城史雄が4月中旬から参加し、のち山隈と交替した。

## 2 調査の体制

発掘地点・期間・関係者などは、以下の通りである。

遺跡名 神の元1号墳（鬼のいわや古墳）

所在地 熊本県宇土郡不知火町大字高良618番地

調査面積 約220m<sup>2</sup>

調査期間 1991年3月7日～7月19日

調査組織 1990年度 調査責任者 文化課長 江崎 正

教育審議員（課長補佐） 限 昭志

教育審議員（課長補佐） 中川 義孝

文化財調査第1係長 松本 健郎

調査事務 経理係長 上村 忠道

主任主事 大広 美枝子

主任主事 川上 勝美

調査担当 文化財保護主事 中岡 昇

嘱託 山隈 誠

1991年度 調査責任者	文化課長	大塚 正信
	教育審議員（課長補佐）	隈 昭志
	課長補佐	松崎 厚生
	文化財調査第1係長	島津 義昭
調査事務	経理係長	木下 英治
	主任主事	大広 美枝子
	主任主事	川上 勝美
調査担当	文化財保護主事	中岡 升
	主事	古城 史雄
	嘱託	山隈 誠
専門調査員	大分市立歴史資料館館長	木村 幾多郎

調査協力 不知火町役場、不知火町教育委員会、宇土市役所、県宇城事務所耕地課、井上正  
 浦田信智（西合志町教育委員会）、木下洋介、高木恭二（以上宇土市教育委員会）  
 谷口義介（熊本短期大学教養科教授）、安達武敏、鶴田倉造（熊本県文化財保護指導  
 員）、鶴谷力夫（不知火町文化財保護委員）、林 行敏、古田一英、上田正幸  
 上羽次男、内田鉄男、対田勝義、庄村巖、浦田カツエ、中内土木、高木工業  
 西村造園

#### 調査作業員

浅川義男、上坪キヨ子、境 正、浜田フサ子、福原博信、古川はなえ

### 3 遺跡の環境

1972年に『不知火町史』が刊行されたが、それ以降この地域の考古学的知見はほとんど進展していない。むしろ、遺跡が破壊されたり、かつて所在がわかっていた遺跡の位置が確認できなくなってしまっており、文化財保護の面からは後退した状況もあった。

宇土半島の不知火海に面した半島南部地域には、細長い谷が内陸深く入りこみ、有明海に面した北部地域とはその景観を異なる。半島南部地域では古代には海が谷にそって湾入し、天然の良港の条件を満たしていたと考えられる。神の元1号墳が所在する高良丘陵の西側もそのような地形であり、その最奥部の浦上に立てば、そこから不知火海まではほとんど平坦であることに気づく。このような地形は干拓には好都合であり、近世までにはほとんどが陸地化された。

半島北部地域では山地が急崖となって落ち込み、宇土・住吉・網田以外にはあまり農業や港に適した地点はない。緑川・白川の沖積作用を考えると、古墳時代の有明海側の地形は現在のそれと大幅に異なっていたと思われる。古代地形復元のための本格的調査を期待したい。<sup>2)</sup>

縄文時代の遺跡は、宇土市古保里・松山、不知火町東原、松橋町上の原にかけて広がる標高約5m～10mの台地上に存在している。不知火町では、縄文早期と晩期の遺跡の発見はあるが、今のところ縄文前期・中期・後期の遺跡は知られていない。

弥生時代になると、縄文時代と同様の台地上の遺跡以外に、塚原貝塚など低湿地に面した遺跡もある。弥生時代の文化圏を考えるとき、宇土半島基部が北九州型の文化…例えば須久式豪棺・今山製石斧など…の南限であることが指摘されている。このことは、前期古墳が北九州について、宇土半島基部にいちはやく成立することと無関係とは思えない。<sup>3)</sup>

宇土半島基部の前期古墳は、以下の3つのグループに分けられる。<sup>3)</sup>（第13図）

- ① 立岡・花園地区（不知火海↔松橋↔向久原↔立岡・花園↔有明海ルート）
- ② 御領・松山地区（不知火海↔御領・松山↔有明海ルート）
- ③ 長崎・栗崎地区（不知火海↔長崎↔浦上↔栗崎↔有明海ルート）

前期古墳の築造は、その多くが不知火海と有明海の両方を望む丘陵の頂上付近に造られている。①のグループでは、時代が新しくなるにつれ低地に立地する傾向が読み取れ、中期以降も墳形・規模を変えながら古墳が築造される。②のグループでは中期に属する古墳が少なく立地の変遷の傾向を探るのは困難であるが、大局的には①と同じ傾向が読み取れる。その中で標高約65mの丘陵上に立地する宇賀岳古墳は、装飾古墳というだけでなくその立地から見てもこのグループでは特異な存在である。③の北部では、城ノ越古墳から追ノ上古墳・スリバチ山古墳と標高をあげて築造されたが、その後はかなり離れた地点にこの地域最大規模の前方後円墳である天神山古墳が築造される。その他この地域で目立ったものとしては埴輪片が出土した神合古墳があり、また宇土市西岡台・石瀬からも埴輪片が出土しているが詳細は不明である。

南部の長崎地区では地形的制約のためか古墳の立地は他の地域と多少違った傾向を示す。<sup>4)</sup>



第1図 周辺遺跡分布図

No.	名 称	備 考	No.	名 称	備 考
1	チヤン山古墳	●	41	仁王塚古墳	
2	古墳参考地(字南山内)	●	42	柳下古墳	庄村巖、消滅
3	南山内石蓋土礫墓	●	43	塚原貝塚	弥生
4	南山内古墳	●	44	塚原古墳(塚原平1号墳)	
5	南山内箱式石棺群	●	45	塚原平2号墳(推定地)	庄村巖
6	御手水2号墳	●	46	塚原平箱式石棺1号	庄村巖、消滅
7	御手水古墳		47	塚原平箱式石棺2号	庄村巖
8	古墳参考地(字向野田)	●	48	古墳推定地	庄村巖
9	向野田石蓋土礫墓	●	49	柳迫古墳	庄村巖
10	向野田古墳		50	大迫1号墳(大迫北古墳)	
11	ギリギス山古墳	吉田一英、消滅	51	大迫2号墳(大迫南古墳)	
12	嫁板遺跡A地点	吉田一英、調文	52	塚原1号墳	
13	嫁板遺跡B地点	吉田一英、調文	53	塚原2号墳	
14	柏原遺跡	吉田一英、調文	54	塚原3号墳(推定地)	庄村巖、上羽次男
15	柏原古墳		55	塚原4号墳(推定地)	庄村巖
16	御領東原3号墳		56	塚原5号墳	庄村巖
17	御領東原2号墳		57	塚原6号墳	高木恭二
18	御領東原1号墳		58	塚原7号墳	庄村巖
19	宇賀岳古墳		59	古墳推定地	庄村巖、消滅
20	御手洗遺跡(御手水)	光永文熙、字名は東原 東隣の字は御手水	60	古墳推定地	庄村巖、消滅
21	出町遺跡B地点	吉田一英、調文、弥生	61	古墳推定地	庄村巖、消滅
22	出町遺跡A地点	吉田一英、箱式石棺	62	神の元1号墳	
23	出町遺跡A地点北貝塚	吉田一英、弥生	63	神の元2号墳	中岡昇
24	出町遺跡A地点南貝塚	吉田一英、弥生	64	渓野箱式石棺群	庄村巖、西村剛 石棺材は動いている
25	松橋大塚古墳		65	十五社箱式石棺1号	浦田信智、消滅?
26	山王平古墳	●	66	十五社箱式石棺2号	浦田信智
27	神合古墳	●	67	十五社箱式石棺3号	浦田信智
28	猫ノ城古墳	●	68	十五社箱式石棺4号	庄村巖、元不知火小教諭 後藤秀喜氏発掘、前説?
29	城ノ越古墳	●			
30	古墳参考地(字北諸)	●	69	新村古墳	
31	久保2号墳	●	70	朱斗墓跡	
32	久保1号墳	●	71	長崎城の越古墳	内田鉄男、消滅?
33	下松山遺跡	●、弥生	72	鴨籠古墳	
34	北瀬遺跡	○	73	鴨籠2号墳	調査確認の必要
35	北瀬鬼塚古墳		74	倉の元古墳	内田鉄男、対田善義、消滅
36	追ノ上古墳		75	八の久保古墳	位置確認の必要、消滅
37	スリバチ山古墳		76	道免古墳	上田正幸、消滅?
38	浦上鬼のいわや古墳	川口一二、消滅 町史記載の浦上山古墳か	77	国越古墳	
39	大平横穴墓	●	78	東崖屋浦箱式石棺	町史P.65の写真不明
40	北諸遺跡	○	79	弁天山古墳	
			80	弁天山箱式石棺群	位置推定、調査確認の必要

第1表 周辺遺跡地名表

当地域の遺跡は、過去にかなり破壊され消滅している。文化財保護の観点から遺跡の可能性のあるものは、できるかぎり遺跡として記載したので、将来発掘調査での確認を必要とするものもある。なお、情報提供者を備考欄に記載した。

第1図 周辺遺跡分布図の遺跡の位置は、下記以外のものは、今回の遺跡分布調査に基づく。

●…『宇土半島基盤古墳群』、宇土市教育委員会、1987による

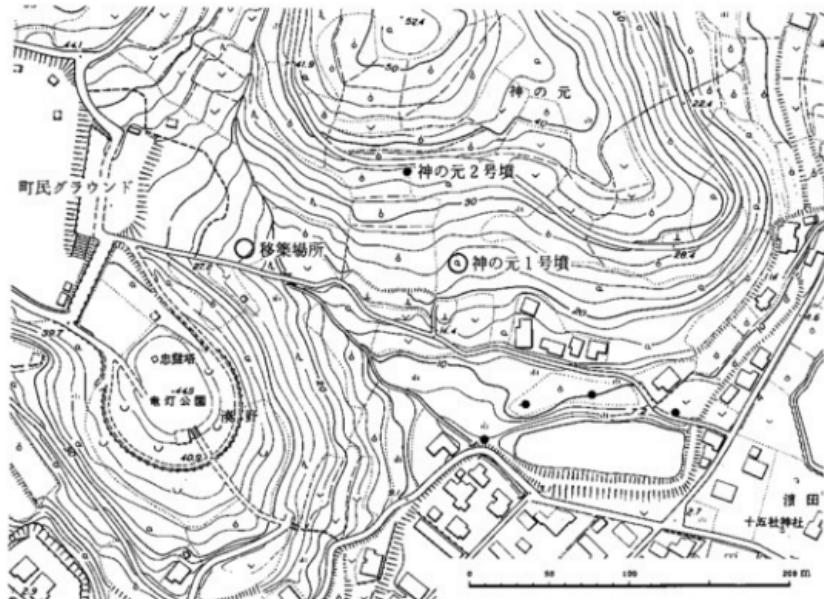
○…『熊本県遺跡台帳』、熊本県教育委員会による

破壊された古墳、未発見の古墳があるにしても、古墳時代中期の大型古墳が宇土半島基部に少ないと。その理由として「春日部屯倉の設置と火君の移動」という政治的原因をあげる説も主張されているが、考古学の示す年代・状況と一致しているか再検討する必要があろう。

後期には、前方後円墳が各グループで多くは、単発的に造られる。また、1枚の偏平な巨石で玄室各壁をつくる北園鬼塚古墳、御領東原1・2・3号墳などが、平野・低湿地に面する低い台地上に築造されるようになる。さらに、前期・中期に古墳が築造されることのなかった高良丘陵に、古墳時代終末期になって急に多くの円墳が築造されるようになることが注目される。古墳時代の集落跡の推定地は第13図のとおりであるが、前方後円墳・古墳の数に比べて少ない。

今回調査した神の元1号墳は、不知火町の高良丘陵にある。隣接の前方後円墳までの距離を測ると、古墳時代前期の弁天山古墳は西に約1.5km、同じく前期の向野田古墳は北東に約2km、古墳時代後期の仁王塚古墳は北に約1.3km、同じく後期の松橋大塚は東に約1.6kmのところにある。高良丘陵に前方後円墳が存在しないのなら、それなりの理由が必要であろう。

時代は降るが延喜式諸国駅伝馬によると、この地域の駅馬として、…豪義（熊本市子飼に比定）、球磨（城南町隈庄）、長崎（不知火町長崎）、豊向、高屋…があり、鎌倉時代ごろまでは緑川・白川が陸路の障害となっていたため、宇土半島基部は西海道西路ルートから外れている。しかし、有明海と不知火海を結ぶルートとしてではないが駅馬に長崎があることは、この地が不知火海から天草への海上交通の拠点として、また熊本市江津を国府の港にあて宇土市網津をそれと関係する国津にあてる説が妥当であるなら、この地域も有明海海上交通の重要地であり続けたことになる。



第2図 遺跡周辺地形図

## 第2章 調査の記録

### 1 古墳の遺存状況

神の元1号墳は、高良丘陵の南東に延びる支丘陵の南斜面に切り開かれた畑の東辺に位置していた。古墳の遺存状況は、奥壁を構成する2個の腰石、左・右壁各1個の腰石、羨道を構成すると思われる立石1個の計5個のみが原位置をとどめている状態であった。

石室内には大小様々な石が投げ込まれており、天井石に使われたと考えられる大石と石室壁に使用されたと思われる石が腰石にかぶさるように乗っていた。奥腰石の上から外側にかけては大石3個がずり落ちたような状態で残っており、また畑の周りの段落ちには、古墳の石材と思われる安山岩が多数、段落土留めに利用されていた。

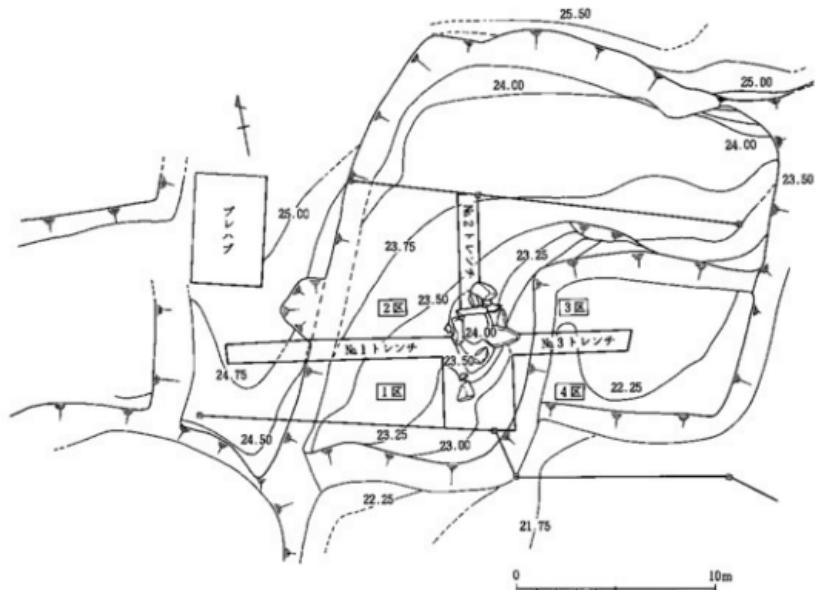
古墳の西北から東北にかけてはバックフォーで削られていた。最近の焚き火のため、石室左側腰石の外側一帯に多量の灰が堆積しており、左腰石の外側一面が焼けて剝離しかかっていた。地元の人の話では、当古墳は1927（昭和2）年ごろ盗掘されたということである。

### 2 発掘の経過

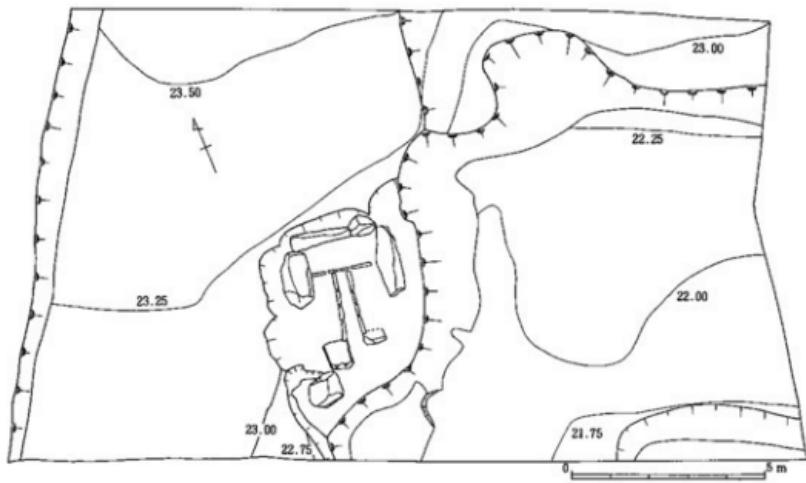
3月7日にプレハブを設置したが、調査作業員が確保できなかったこと、石室上の大石を除去する重機の搬入が農道検査終了後にしかできなかっただため、3月中は写真撮影・地形測量などが作業の中心となった。3月末から4月上旬にかけては年度末整理のため、また6月から7月上旬にかけては例年ない長雨が続いたため、発掘作業ができた日は少なかった。発掘作業の経過は、第2表を参考にされたい。

第3図のようにトレンチを設定した。薄い腐植土層（第1層）の下に、約20cm耕作土（第2層）、その下が地山の赤褐色のローム層であり、各トレンチはローム層が出るまで掘り下げた。No.1トレンチの西側で溝のようなものが検出されたが、第2層を全面剥いだ結果、溝は畑に関係するものであった。No.1トレンチは急のため一段上の段まで拡張したが、No.2トレンチ・No.3トレンチと同様、古墳に関係する遺構は検出できなかった。

なお、石室プランが判明する前にトレンチを設定しなければならなかっただので、トレンチ基準線と石室実測基準線とは一致していない。

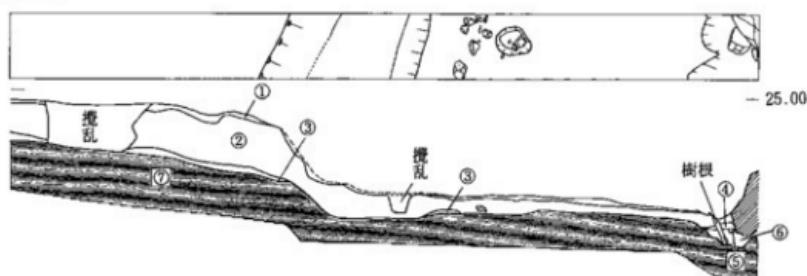


第3図 神の元1号墳調査前現況図

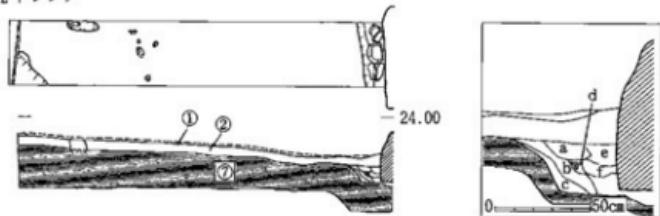


第4図 神の元1号墳完掘状態実測図

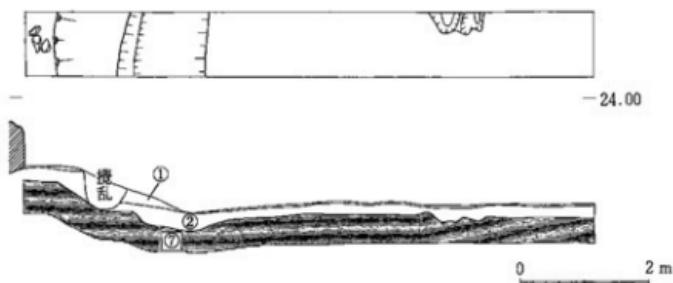
No.1 トレンチ



No.2 トレンチ



No.3 トレンチ



土層名

- |                  |                      |
|------------------|----------------------|
| ① 暗褐色土（腐植土）      | a 褐色土（堅いブロック、黒点混じる）  |
| ② 褐色土            | b 暗褐色土（やや軟らかい）       |
| ③ 黄褐色土           | c 赤褐色土（粘質）           |
| ④ 暗褐色土           | d 暗褐色土（堅い、bより黒く堅い）   |
| ⑤ ブロック           | e 褐色土（堅いブロック、黒点混じらぬ） |
| ⑥ 暗褐色土（粘質、黒点混じる） | f 青白色粘土              |
| ⑦ 赤褐色粘質土         |                      |

第5図 トレンチ実測図

週	発掘内容
3月7日～3月8日	プレハブ設置、発掘道具準備
3月11日～3月16日	二次的堆積土除去、現状写真撮影、平板測量
3月18日～3月22日	平板測量の続き、No.1トレンチ発掘開始
3月25日～3月30日	(調査作業員2名参加)
4月1日～4月6日	玄室の上に乗っていた大石などを重機で除去
4月8日～4月12日	No.1トレンチを西側に延長(調査作業員5名に)
4月15日～4月20日	No.2トレンチ発掘、石室内の土石の除去
4月22日～4月26日	石室内発掘開始、高良丘陵古墳分布調査、No.3トレンチ発掘
4月30日～5月2日	奥屍床発掘、通路発掘、羨道部発掘
5月7日～5月10日	奥屍床実測、石室掘り方検出
5月13日～5月18日	右屍床・左屍床の発掘開始、右屍床写真撮影・実測 第2層(新作土)を重機で除去
5月20日～5月24日	遺跡全体写真・石室全体写真撮影、4区の発掘作業 石室平面図作成開始、高良丘陵古墳分布調査
5月27日～6月1日	断面図作成開始
6月3日～6月8日	断面図作成継続、青白色粘土断ち割り
6月10日～6月15日	右屍床断ち割り、プレハブ撤去となりテントで調査
6月17日～6月21日	左屍床断ち割り、古墳使用石材を移築場所に運ぶ 石室断面図を腰石抜き取りスタンプで補足
6月24日～6月29日	奥屍床の断ち割り開始、(調査作業員0名となる)
7月8日～7月12日	雨のため、1週間発掘作業できず
7月15日～7月19日	石室掘り方実測 石室掘り方写真撮影、地形測量、発掘道具収

第2表 発掘作業進行表

### 3 石室の築造

腰石に使用された石材は、全て安山岩で遺跡付近に多く見かけられるものである。袖石に使用された石材は凝灰岩で、表面に鮮やかなノミ跡が見られ(図版9)、仕切石は含角閃石輝石安山岩<sup>13)</sup>を使用していた。

#### (1) 掘り方

地山がかなり削平されていたため、掘り方の確認は困難であったが、比較的残存状態のよかつた石室北側については、立ち上がりが急であることから今回の調査で検出したプランとあ

まり変わらないであろう。

各腰石・袖石の掘り方の深さ、下込め石・裏込め石の有無、腰石下の土層などについて、以下簡単に述べる。

a 玄室奥壁腰石の掘り方

奥壁左腰石の掘り方が一番浅く平坦であった。腰石の下は、黒色斑点混入の薄茶褐色の硬化した薄い層があったが、下込め石はなかった。腰石は、厚さ30cm～40cmの偏平な石を使用しており、奥壁外側では、拳大からハンドボール大の裏込め石5個を、奥腰石を固定するために使用している。

奥壁右腰石の掘り方は、奥壁左腰石と高さを合せるためかかなり深く掘り、その上に硬くしまった黒色斑点混入の茶褐色土があり（約2cm）、その上に腰石を置いている。10～20cm大の下込め石4個を北側から差し込んで、腰石を垂直に保っている。なお、奥壁の左・右腰石の間に青白色粘土が詰めてあった（粘土が少し混ざって灰色になった部分を含めると40cm×50cmの範囲で厚さ20cm、青白色粘土のみの範囲は30cm×20cmで厚さ6cm）。

b 玄室左壁腰石の掘り方

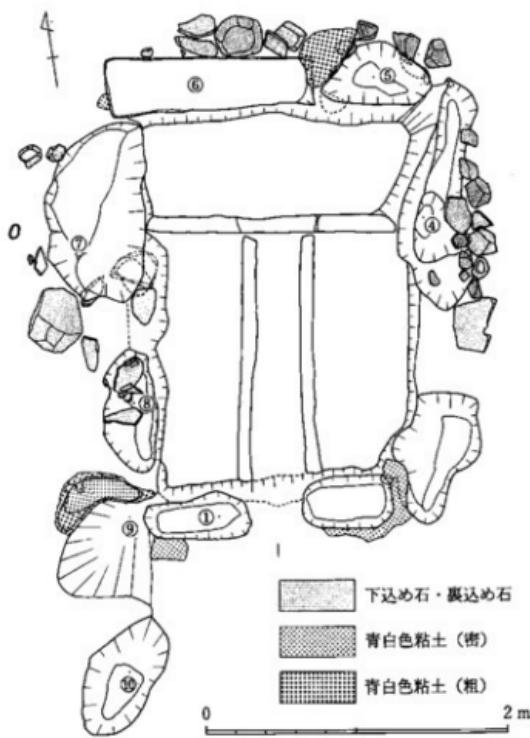
左腰石には、最も大きい石材を用いている。左腰石の掘り方は、大きく深く掘りその上に黒色斑点混入の茶褐色土が厚さ約20cm、その上に黄褐色土が突き固められたような状態で乗っていた。南部分には、茶褐色・黄褐色土の上に、暗褐色土が乗っていた。左壁腰石は他の腰石と較べ一番厚みがあるが、南半分は腰石が小さくなっているためその部分に3個の下込め石（20～30cm大）を暗褐色土の中に埋めこんでおり、さらにその上に南側から4個の下込め石が差し込まれたように置かれ腰石の南北方向の水平を保っていた。なお、奥壁左腰石との間には、青白色粘土が他に比べると少量であるが検出された。

掘り方から、左壁腰石はもう一つあった。地山の上に、黄褐色の石が風化したものと見む灰褐色質土層が作られ（厚さ約4cm）、その上に薄い板状の石（厚さ1cm）が数かれ、さらにその上に厚さ7cmばかりの下込め石1個が置かれていた。

c 玄室右壁腰石の掘り方

右腰石の掘り方は、石の底部にあわせて中央部を深く掘っていた。腰石の下には、硬化した薄い層があった。10cm～20cm大の裏込め石11個が検出され、それらが偏平な腰石を支えていたと考えられる。

玄室右壁は、現存している腰石のほかにもう一つ腰石があったことが掘り方からわかる。その腰石の掘り方では、下込め石・裏込め石は検出できなかった。掘り方から考えると、この腰石は右袖石の東側まで続いており、左屍床の腰石が左袖石の端までで終わっているのとは異なる。

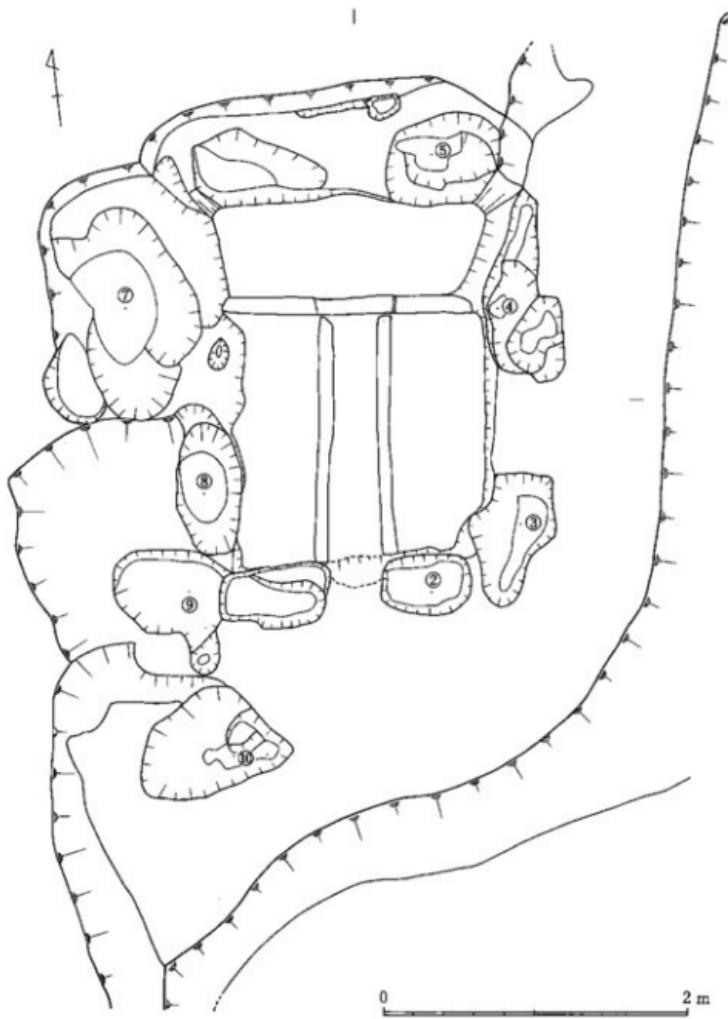


第6図 石室腰石抜去状態実測図

第6図・第7図①～⑩地点のレベル (24.00mからのマイナス値、単位cm)

第6図	
①	146.0
②	—
③	—
④	138.5
⑤	120.0
⑥	107.0
⑦	107.0
⑧	120.0
⑨	127.0
⑩	144.0

第7図	
①	—
②	151.0
③	146.0
④	139.5
⑤	122.0
⑥	—
⑦	123.0
⑧	123.5
⑨	132.9
⑩	148.0



第7図 石室完掘状態実測図

#### d 左袖石の掘り方

左袖石の掘り方は、底部で20cm×60cmの大きさで、底はほぼ水平であった。青白色粘土が袖石南西部分に厚く分布していた。

#### e 右袖石の掘り方

右袖石の掘り方は、底部で25cm×50cm、底部は水平ではなく北の方に行くにしたがって高くなっている(10cmの高低差、袖石底部の角度にあわせたと考えられる)。青白色粘土が、袖石の南東にかけて掘り方面より上に厚く分布していた。

#### f 美道部の掘り方

##### ★左側

立石周辺は削平が激しく、掘り方の残存部分も少なかった。地山を石の形にあわせた掘り方の底部分とその上に黒色班点混入の茶褐色土が約2cmの厚さで確認されたが、下込め石・裏込め石は見つからなかった。また、この立石の北側、左袖石の西側にもう一つ掘り方があり、ここにもこの立石と同じ規模の石があったことが推定される。地山の上に黒色班点混入の茶褐色土が約6~10cmの厚さで検出された。この掘り方と左腰石(掘り方のみ)の間には、青白色粘土がかなりな量認められた。

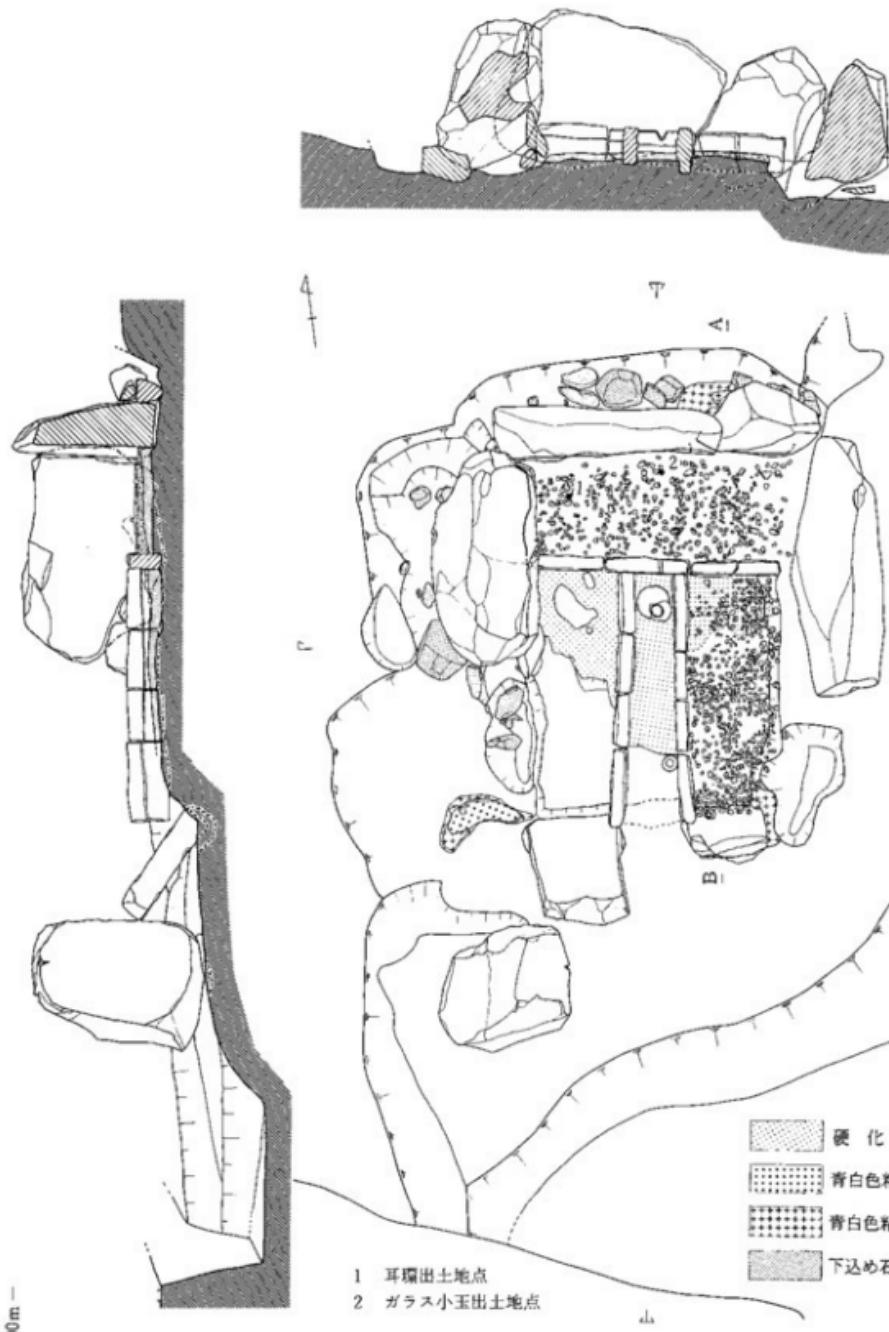
##### ★右側

破壊が激しく、美道部に関する掘り方は検出できなかった。

## (2) 石室の築造・上部構造

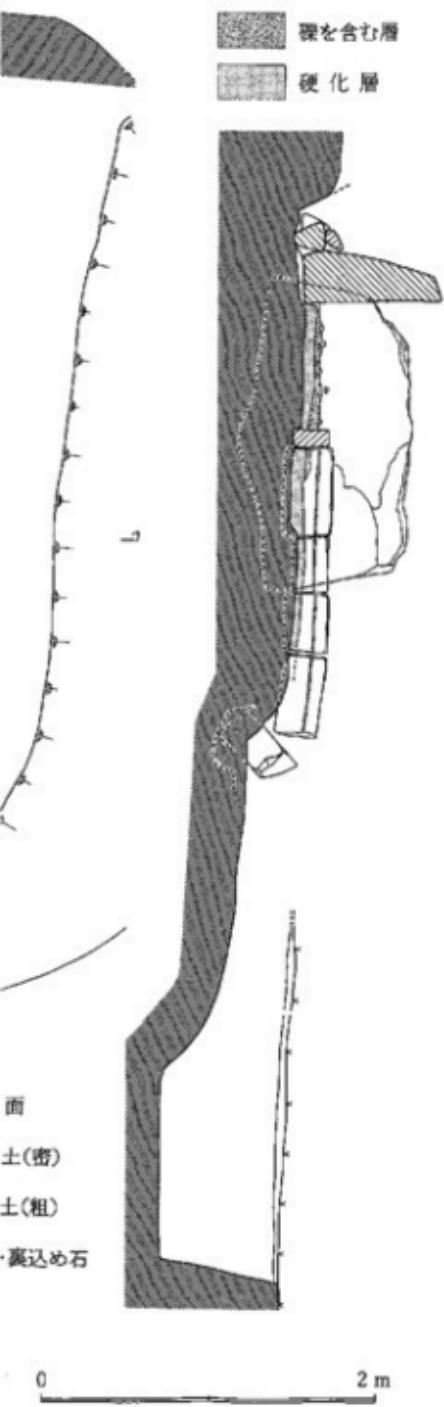
奥壁外側の掘り方の奥行が狭いことや腰石の咬み具合から、いちばん最初に奥壁の2個の石を置いた後、両側の腰石を左右各2個づつと美道部の石を設置し、次に屍床仕切石と袖石が設置されたと考えられる。青白色粘土が5ヶ所で検出されたが(第6図)、石室東北隅では青白色粘土は、精査したにもかかわらず攪乱・破壊が他の場所に比べ激しかったせいか検出できなかった。南西・南東部分はかなりの量の粘土が使用されており、特に南西部は残存状態がよかつた。腰石より上の構造を知る手掛かりはほとんどないが、以下のことから考えて、高良古墳群の塙原1号墳と同じように、腰石の上に大きな石を積み上げて石室をつくった可能性が高い。

- 1 天井石に使用されたと思われる大石が腰石に覆いかぶさるようにあった。
- 2 奥腰石の上にかぶさって大石3個が上からずり落ちたような状態にあった。
- 3 玄室内にも長さ1m位の偏平な大石があった。
- 4 玄室内に投げ込まれていた石や周りに残っていた石を見ると、20cm以下の小さな石と大石がほとんどであった。



第8図 石室実測図

- 24.00m



- 24.00m

### (3) 玄室およびコの字形屍床

#### a 玄室

玄室の規模は、奥行き約255cm（玄室中央部分）、東西幅は奥屍床仕切石部分で約172cm、袖石側で推定約160cmと、袖石側が少し狭くなったプランである。奥壁・右壁・左壁とも2個の腰石で作られていた。

#### b コの字形屍床

含角閃石輝石安山岩を整形・加工した仕切石（厚さ約9cm）を用い、奥屍床・右屍床・左屍床を、コの字形に作っている。仕切石は全部で11枚（奥屍床3枚、左右屍床各4枚）あり、全仕切石の上から約9cmまで上部を削り落として、片面に幅約1cmの段を作りだしている。段は平均して削りだされているものは少なく、上部を薄く段の部分を厚く削っているものが7例（仕切石実測数値表の丸数字）をしめる。段を作りだした理由については、段の幅が約1cmと狭いこと、奥屍床3枚の仕切石にも段が作り出されていることから、通路に關係するものではなく、高さを示すラインか一種の装飾と考えられる。

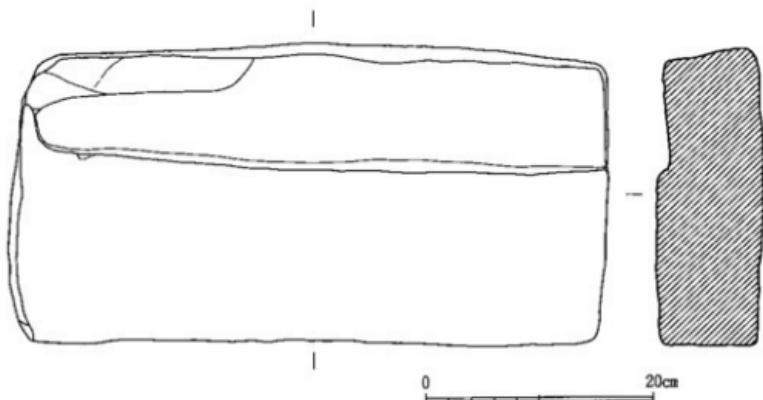
	No	横	縦	厚さ			段の位置 (上から)	段の幅
				上部	段の位置	下部		
奥屍床	①	54.1	25.8	8.2	9.1	8.7	9.5	1.0
	②	59.3	21.9	10.8	10.8	9.6	9.0	1.1
	③	60.5	24.7	9.3	10.7	11.1	8.0	1.4
右屍床	1	48.0	25.0	8.0	9.5	10.0	9.0	0.7
	②	34.4	26.2	7.1	8.2	8.5	9.0	0.6
	③	32.5	21.7	8.0	8.3	7.0	8.2	1.0
	4	53.7	28.5	7.9	8.7	9.3	7.8	1.1
左屍床	①	54.4	27.3	7.9	9.0	9.8	10.5	1.5
	②	37.8	25.0	7.7	8.2	8.5	10.8	1.0
	3	40.3	23.2	9.0	9.2	8.0	10.5	1.0
	4	41.5	26.5	8.0	9.5	9.3	9.7	1.1
平均							9.3	1.0

第3表 仕切石実測数値表（単位cm）

数値は、測定場所によってことなるので参考程度。

奥屍床仕切石は、西側から順にNo.1→No.3とした。

左・右屍床仕切石は、南側から順にNo.1→No.4とした。



第9図 奥尾床No.1仕切石実測図

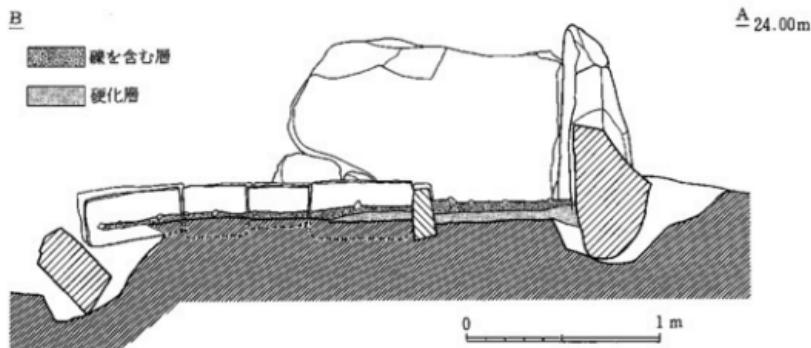
#### ★ 奥尾床

右腰石が東へ倒れていたが、復元すると奥尾床は南北幅約75cm（中央部）×東西長さ約175cmである。（数値はすべて内法、以下同じ）No.2仕切石の通路中央やや右にあたる部分に、U字形の溝（幅約6cm、深さ約5cm）がある。溝の最下端のレベルは、奥尾床の礎と同じ高さであった。

尾床の床は、地山の上に厚さ約5cmの紫褐色の層を尾床一面に突き固め（奥尾床の仕切石の下は硬化面はほとんどなし）、その上一面に、礎を厚さ4～5cmほど粘りのある土で敷き固めていた。ガラス小玉1個を尾床ほぼ中央北寄りの礎直上で検出。また、耳環を礎の含まれている層で1個検出した。その他に骨小片が、仕切石の上面レベルより上の黒褐色の擾乱層から出土した。

#### ★ 右尾床

右尾床は、右腰石・奥尾床の仕切石・4枚の仕切石・棗灰岩で作られた厚さ約22cmの袖石で構成される。袖石は、一番下の部分が通路側にすこし張り出しており、これは左袖石も同様である。（図版9）袖石は、上部を大きく破損されており南に倒れた状態であった。垂直に復元すると仕切石の長さに比べると約6cm短くなるので、もともと少し南に少し傾斜して立てられていたとしか考えられない。そのようにして復元すると、幅約62cm（北側）～約45cm（南側）×長さ約170cmを測る。奥尾床と同じレベルで礎が検出された。礎の含まれていた層を取り除くと、硬化面が北側から約4分の1で検出できた。地山の上にこの硬化面をつくり尾床を構成している。（この硬化面が奥尾床の紫褐色の硬化層にあたり、尾床基礎面を作ると同時に仕切石を固定するためにも使用されたと考えられる）南東部分から、土師器の小型短頸壺が礎より少



第10図 右屁床断面図

し浮いた状態で出土したのみである。

#### ★ 左屁床

左屁床は、腰石・奥屁床の仕切石・4枚の仕切石・凝灰岩で作られた厚さ約21cmの板状の袖石で構成される。幅約61cm（北側）～約45cm（南側）×長さ約175cmで、右屁床の大きさとはほぼ同じである。硬化面が北側から約3分1の範囲で検出された。当初は盜掘の時に残りの硬化面は破壊されたのではないかと考えていた。しかし、攪乱されていない右屁床でも北側部分だけしか検出できなかつたので、もともとこの硬化面は屁床全面にあったのではなく当初からこの部分だけではなかったかと考える。

奥屁床や右屁床に大量に見られた礫が全く検出されないような状態であったことから、左屁床には当初から礫はなかったと推定される。出土遺物なし。

#### c 通路

長さ約175cm、幅は北側で約26cm、中央部で約32cm、南端近くで約38cmと若干末広がりに作られている。通路床面と考えられる硬化面が仕切石上面から14～15cm下に確認できたが、南側では攪乱を受けていたため硬化面を検出できなかつた。硬化面の厚さは、通路北側から45cmほどは8～9cmと厚く（屁床硬化面と同じものが通路にもありその上に通路の硬化面が重なって厚くなつたのであろう）、それより南側は約4cmの厚さであった。通路も断ち割って層を確認したが、地山の上にこの硬化面が乗るだけであった。通路北端で須恵器の台付広口壺・高杯、杯身が各1個（台付広口壺の口の部分のなかに高杯、高杯の中に杯身が入つた状態で）出土。（図版6）

また、通路南部分の攪乱された部分で土師器の杯身1個が出土。

#### d 羨道

羨道部分は激しく破壊されているが、西側の掘り方・立石から考えると、東西幅約160cm、奥行きは最低で約115cmはあったと推定できる。遺構確認のため、東西方向に3断面をとり確認したが遺構を検出できなかった。排水施設の有無についても判断を下す材料はない。一番南の立石が南北中心ラインに向かって出ているので、袖石との間に小さな副室的なスペースを考えることもできる。

## 4 出土遺物

盗掘・破壊を受けていたため、出土遺物は非常に少ない。なお、仕切石上面レベル以下の土は、現場でふるいにかけて遺物の検出をした後、収蔵庫で水洗いして遺物の有無を確認したが、その時にガラス小玉1個を見つめた。

### (1) 石室内出土

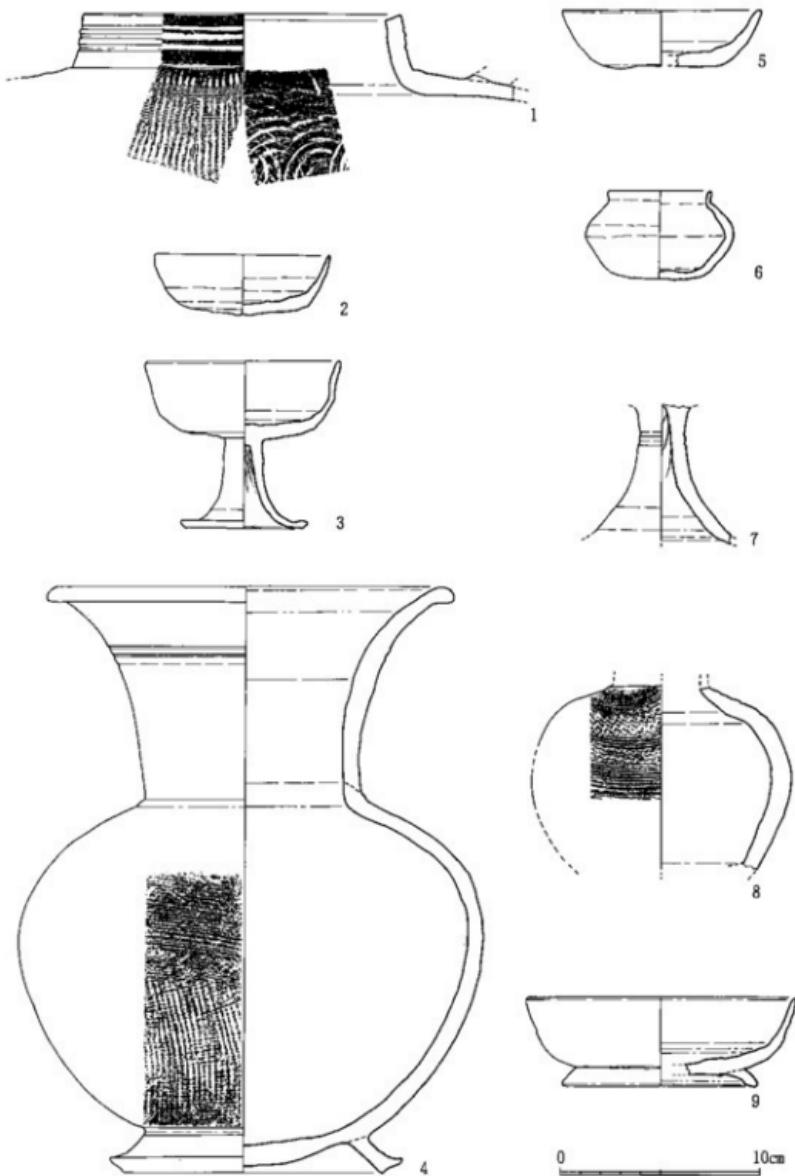
#### ★須恵器

##### ●台付広口壺（第11図4）

石室通路北端で、台の一方を通路硬化面に接し、すこし南側に傾いた状態で出土。次に述べる高环・环を入れた状態で出土したが、尾床仕切石より上の攪乱層から同一個体の破片が出ていること、台の端が数箇所破損していることから原位置から動いている可能性がある。色調は、外面白灰色、内面灰色。胎土やや密、焼成は良好である。高さ29.3cm、復元口径20.6cm～21.0cmを測る。胴部は上から約3分の1のところに最大径があり、丸底に短い台がつき、台端部はとがる。肩部と頸部の接合された部分がすこし厚くなっている。胴部内全面に同心円文たたきが見られ、また頸部内面によこなでを施す。外面は、底部から胴部中位まで格子目たたき、胴部中位以上口縁まではよこなでが見られる。台部は内外ともよこなでである。口縁部外面に、沈線が2条めぐるが浅くシャープさに欠ける。暗緑色の自然釉が外面の一部および頸部内面と底部内面に見られる。

##### ●高环（第11図3）

石室通路北端、台付広口壺の頸部の中に入った状態で出土。脚部をすこし破損していたがほぼ完形である。口縁部は半分が正円で、残り半分は両側から押されてややゆがんでいる。色調は内外面とも黒灰色、胎土やや密、焼成はやや良。高さ8.5cm、口径8.9cm～10.3cm、底径6.4cmを測る。内外両面に一部自然釉がかかる。脚部外面はよこなでを施しているが、小さな凹凸が残る。脚部底面の端近くで、鋭く段をつくる。环部の外面はへら削りの後、削り痕が消えない程度のよこなで、内面はよこなでで調整している。



第11図 遺物実測図

#### ● 坯（第11図2）

石室通路北端、上述の高窓の中に入った状態で出土、完形である。色調は内外面とも青白色、胎土は砂粒を含みやや粗く、焼成はやや良。器高3.0cm、口径8.8cm、底径約6cm。底は回転へら切りの後になでを施しているがきわめてあらいので凹凸が残ったままである。体部は3段にわかれて立ち上がり、口縁はまるい。体部外面は粗い横なで、内面はよこなでの後に内底面のみなでを施す。

#### ● 高台窩（第11図9）

南に倒れるような状態の左袖石と左尾床との間に黒色土と拳大以上の石が混ざる攪乱層があり、その中からの出土。色調は外面灰黒色、内面灰色。胎土は密、焼成は良好。復元口径13.5cm、器高4.5cm、復元高台径9.8cm。体部はなだらかに立ち上がり口縁はまるい。高台は外びらきで、接地面は平に作られているが、実際に接地するのは外側のみである。高台内面に段がつくがあまい。体部外面は粗いよこなで、高台との接合部分にはへら削りの痕を残している。内面はよこなでした後に内底面のみ複数方向のなで痕がある。外底面はよこなでを施している。

#### ● 大窩（第11図1）

腰石より下の攪乱層からの出土、小片。色調は、内外面とも淡い灰色、焼成やや良。復元口径16.0cm。口縁は、高さ2.8cmではば直し、表面に明瞭な3条の沈線がまわり、内外面ともよこなで。肩部に環状把手痕が見える。口縁部との接合部が少し厚く、その部分の中ほどから平行たたきが始る。平行たたきの後に、回転かきめを施している。肩部内面は、同心円文たたき。

#### ★土師器

##### ● 小型短頸壺（第11図6）

右尾床南西端で、尾床縁面より少し浮いた状態で出土。色調は、内外面とも黄褐色で、胎土はやや密、焼成やや良。口縁部の一部を欠くがほぼ完形。器高4.5cm、口径5.2cm、胴径7.4cm、底径約4.3cmを測る。底部はへら切りの後になでを施しているが凹凸がかなり残る。頸部のよこなでから考えるとろくろを使用していると考えられるが、体部は左右でかなり歪んでいる。頸部は、短く外反し、他の部分に較べ薄く作られている。底部を除き、内外面とも粗いよこなでを施している。

##### ● 坩（第11図5）

通路南側の攪乱されたところから伏せた状態で出土、当初完形品だった。色調は、内外面とも黄褐色、胎土は密、焼成やや良。復元器高2.9cm、復元口径10.0cmを測る。底部と体部の境は不明瞭で、底部は凹凸がかなりある。口縁部が他の部分より少し薄く仕上げられている。内外面ともよこなでが施されていると考えられる。

### ★耳環（第12図1）

奥屍床の礫を含む層からの出土（第8図）、銅の棒を環状にまげ表面に金をかぶせたものである。長径1.9cm、短径1.8cmで、断面は長円形を呈し、幅0.6cm、重さ5.9gを測る。

### ★ガラス小玉（第12図2、3）

2の小玉は、奥屍床左半分の仕切石上面以下の土を収蔵庫で水洗いしていて検出したもので、残りが悪く現在白色を呈している。風化が激しいが内径だけは0.3cmを測ることができた。

3の小玉は、奥屍床の礫を含む層に接して出土、現在は銀色を呈している。表面に淡い黄色の部分が付着しているが、本来の色は不明。風化がかなりすんでおり表面の残りは悪いが計測にたえる。外径0.9cm、内径0.5cm、厚さ0.4cm、重さ0.6gを測る。

なお、石室内出土遺物の中に骨小片と少量の貝類が含まれていたので、大分市立歴史資料館館長木村幾多郎氏に鑑定を依頼した。結果は以下のとおりである。

### ★貝類

カキ（小片2） アカニシ（核軸1） ハイガイ（1）

★骨片（小片1、人の足根骨の可能性）

## （2）石室外からの出土

### ★須恵器

#### ●長頸壺（第11図8）

石室内攪乱層と4区2層出土の7片を接合したもので、長頸壺と推定。下端に底部内面がほんの一部残っている。色調は、内外ともに灰黒色。胎土は密、焼成は良好、胴部最大径13.0cmを測る。胴部内面はよこなで、肩部内面はよこなでの後に頸部をしばったことが観察される。胴部下半分はへら削りで、上半分は粗いよこなでの上に3条のくしがき文が2帯めぐる。くしがき文より上は丁寧によこなでを施している。

#### ●高杯（第11図7）

3区の2層上面で出土、脚部のみ。色調は、内外とも明灰色。胎土は砂粒が少量混入し、焼成はやや良である。内外面ともよこなでを施し、浅い沈線が2条めぐる。

この他にも石室外から、土器片が出土しているが、器形を推定できるものはないので、記



第12図 耳環・ガラス小玉実測図

述は省略する。

## 5 古墳分布調査

熊本県教育委員会文化課は、文化庁からの補助金を得て1989年度から県内の遺跡分布調査に取り組んでいる。不知火町の遺跡分布調査は、神の元1号墳の発掘調査との関連でとりあえず当古墳が所在する高良丘陵からはじめることにし、熊本県文化財保護指導員・不知火町文化財保護委員の鶴田倉造氏に調査を依頼した。第1図の周辺遺跡分布図は、この調査に基づくものである。調査日時・調査者は以下の通りである。

1991年3月24日

第1回高良丘陵遺跡分布調査（鶴田倉造、浦田信智）

1991年3月28日

第2回高良丘陵遺跡分布調査（鶴田倉造、庄村巖、谷口義介、浦中耕太郎、嶋谷力夫他）

1991年4月22日と5月23日

高良丘陵遺跡確定作業（鶴田倉造、庄村巖、中岡昇）

1991年10月22、23日

浦上・長崎地区の遺跡分布調査（嶋谷力夫、浦中耕太郎、中岡昇）

1991年10月30日

弁天山地区の遺跡分布調査（鶴田倉造、嶋谷力夫、浦中耕太郎、中岡昇）

1991年11月6日

御領・柏原地区の遺跡分布調査（鶴田倉造、嶋谷力夫、中岡昇）

1992年1月19日

塚坂遺跡、出町遺跡の場所確認（古田一英、中岡昇）

## 第3章 調査のまとめ

### 1 神の元1号墳

#### (1) 墳丘・規模など

墳丘の規模を示す遺構・遺物は、削平が激しく検出できなかった。あえて地形から推定するならば直径約10m程度の円墳であろう。

#### (2) 石室

主軸をN-8°-Eにとる両袖式の横穴式石室である。玄室の大きさは奥行き255cm、幅172cmの長方形で、玄門幅は推定45~50cm。

#### (3) コの字形屍床について

含角閃石輝石安山岩製の仕切石で玄室を区切り、奥・左・右の3つの屍床、いわゆる「コの字形」屍床を作る。奥屍床・右屍床には、礫が數き詰められていた。それに対して、左屍床は奥屍床で検出された硬化面とはほぼ同じレベルにある硬化面しか検出されなかった。左屍床だけ礫を敷かず遺体を埋葬した可能性もあるが、むしろ遺体埋葬時に礫を敷き遺体を安置したと考えて、この左屍床には遺体埋葬はなかったと考えておきたい。左屍床から遺物が出土しないこともその傍証となるか。

#### (4) 出土遺物

盗掘によって荒らされ、遺物はほとんど残存していなかった。奥屍床から耳環1・ガラス小玉2、右屍床からは土師小型短頸壺が少し浮いた状態で、通路から須恵器3・土師器1が出土したが、左屍床から遺物は発見できなかった。

出土した須恵器・土師器・ガラス小玉については現位置であるか確定できない。耳環は、礫の含まれる層の中からの出土である。盗掘による攪乱の可能性は少なく原位置と考えられるので、奥屍床では西側に頭を向けて埋葬されたことになる。

#### (5) 築造・利用年代

出土した須恵器から7世紀初頭~前半に築造され、7世紀中ごろまで利用されたと考えられる。

### 2 高良古墳群

高良古墳群は、分布状態から2グループに分けることができる(第1図参照)。塚原2号墳あたりから神の元1号墳までの第1グループ(塚原グループ)と塚原平古墳(塚原平1号墳)の属する第2グループ(塚原平グループ)である。この第1グループと第2グループは尾根を一つおいて離れている。

それぞれのグループごとに箱式石棺が存在しているが、調査がされておらず時期等明確でな



- |             |            |            |
|-------------|------------|------------|
| 1 女夫塚古墳（女塚） | 12 御手水古墳   | 23 北園鬼塚古墳  |
| 2 女夫塚古墳（男塚） | 13 向野田吉墳   | 24 仁王塚古墳   |
| 3 榆崎古墳      | 14 ギリギス山古墳 | 25 天神山古墳   |
| 4 山下古墳      | 15 柏原古墳    | 26 城ノ越古墳   |
| 5 瞢免古墳      | 16 御領東原3号墳 | 27 神合古墳    |
| 6 潤野古墳      | 17 御領東原2号墳 | 28 追ノ上古墳   |
| 7 潤野3号墳     | 18 御領東原1号墳 | 29 スリバチ山古墳 |
| 8 潤野2号墳     | 19 宇賀岳古墳   | 30 鶴籠古墳    |
| 9 西潤野古墳     | 20 松橋大塚古墳  | 31 道免古墳    |
| 10 西潤野2号墳   | 21 塚原平古墳   | 32 国越古墳    |
| 11 チャン山古墳   | 22 神の元1号墳  | 33 弃天山古墳   |

—・— (赤)で囲った範囲は、集落跡と考えられるところ

第13図 宇土半島基部主要古墳分布図

いのが残念である。ただ、立地の面からは標高10m付近に立地するものと、標高40m付近に立地するものがあることが注意を引く。<sup>13)</sup>

高良古墳群では内容の明らかな古墳は少なく、また破壊された古墳も多いので、現段階での古墳群のもつ意義について考察することは困難である。この丘陵の西側は急斜面で落ち込み、その崖下は当時海と考えられるので、高良古墳群に葬られた人々の生活場所をこの付近に求めるならば、塚原グループは丘陵南部の渓野に、塚原平グループは丘陵東側微高地にある塚原が考えられる。古墳の数に比べて、居住可能地も少なく可耕地のない地域である。

ある程度時期が推定できる古墳は、不知火町が1980年から実施している塚原平古墳で、発掘調査者の谷口義介氏によると、6世紀後半に築造され7世紀前半まで何回も追葬利用されたとのことである。塚原平グループの古墳の数が塚原グループに較べて少ないと塚原平古墳の追葬遺体の多さが気になる。また、塚原1号墳はその石室構造から6世紀末葉と推定されており、その年代が妥当であるなら頂上付近の塚原1号墳と最低部の神の元1号墳がほぼ同じ時期に造られたことになる。現存している古墳、過去に破壊された古墳の状態も地元の人聞くところではほぼ同形式の古墳のようであり、高良古墳群は古墳時代終末期に集中的に築造された可能性がある。

現在までのところ、この丘陵またはすぐ近辺で須恵器窯跡・製鉄遺跡・製塩遺跡は明確な形では発見されていないこと、農業の基盤となる平野がないこと、さらに石室の多くが不知火海に面するように開口してしていることなど、海上水運をその経済基盤とする可能性が高い。塚原1号墳に船の線刻があることは、以上のことと符合するが、線刻が当時のものであるかの判断は難しい。

東アジアにおける戦争と内乱の新しい周期の始まりである6世紀末ごろに、海上水運に経済的基盤をおく高良古墳群が形成されたと考えておきたい。<sup>14)</sup>

### 3 宇土半島基部の前期古墳の立地

このように塚原古墳群の経済基盤を海上水運にあるのではないかと推定したが、古墳時代前期にはどうであろうか。<sup>15)</sup>古墳の立地にはそれなりの理由が存在するが、今回調査した神の元1号墳が所在する高良丘陵には現在のところ前方後円墳は見つかっていない。周囲には多くの前方後円墳があるのに、なぜ古墳立地の条件で劣るとは思えない高良丘陵はないのか。逆に、前方後円墳がそれらの地域に築造された理由は何なのか。

宇土半島基部の前期の前方後円墳の立地が、有明海と不知火海を結ぶ陸上交通路と関係することは容易に想像できる。(第13図)そのことと関連して疑問に思うことは、弁天山古墳・鴨籠古墳・道免古墳・国越古墳などがなぜ不知火町長崎に造られたのかということと、城ノ越古墳・スリバチ山古墳・迫ノ上古墳の立地場所であった。長崎地区に前期の前方後円墳がある理由

として宇土半島三角経由の海上水運の拠点とすることもできるが、以下に述べる②③のルートがあるのになぜ遠回りすることが必要なのか。また当時の航海は陸地に沿っておこなわれたと思われるが、有明海から三角をまわり戸馳島を過ぎれば氷川・八代への航海は容易であり、不知火町長崎まで迂回する利点が無いと思われるので、古墳時代前期に限ってではあるが、弁天山古墳のある地域と城ノ越古墳・スリバチ山古墳・追ノ上古墳のある地域とを結びつけて考えてみた。以上の考えから、遺跡の環境のところでも記述したように、宇土半島基部の前期古墳を有明海と不知火海を結ぶルートを基準にして3グループに分けた。<sup>20)</sup>

前期以降の主な古墳を含め、各グループごとに記す<sup>21)</sup>

① 不知火海↔松橋↔向久原↔立岡・花園↔有明海

前期～潤野3号墳、{潤野2号墳}

中期～椎崎古墳

後期～{山下古墳}、女夫塚古墳（男塚）、女夫塚古墳（女塚）

② 不知火海↔(松橋)↔御領・松山↔有明海

前期～御手水古墳、{チャン山古墳}、向野田古墳

中期～{ギリギス山古墳}<sup>22)</sup>

後期～{宇賀岳古墳}、松橋大塚古墳

③ 不知火海↔長崎↔浦上↔栗崎↔有明海

前期～城ノ越古墳、追ノ上古墳、スリバチ山古墳、

弁天山古墳

中期～天神山古墳

{鴨籠古墳}、{道免古墳}

後期～国越古墳

仁王塚古墳

各ルートについてその立地を述べると

①のルート

松橋町の大野川と宇土市潤川を結ぶルートで、現在ではバイパスが通っている。潤野3号墳は、有明海と不知火海を望む地点に立地しているが、中期以降になるとこの地域の古墳は有明海との関連が深い立地へ移り始める。

②のルート

現在の国道3号線のルートである。御手水古墳・向野田古墳は、近世・近代の高良港・松橋港から北に約1キロ離れているが、古墳時代には近世の高良港よりもっと北まで水運があったことは現代の地形から見ても十分可能性がある。<sup>23)</sup> 古墳時代後期の松橋大塚古墳は海に面した台

地上に位置し、大野川をさかのぼれば花園・立岡の①のルートにも通じるが、不知火海と関連が深い立地である。

### ③のルート

古墳時代前期に編年されている弁天山古墳は不知火海に突き出た岬丘陵突端上に、後期の国越古墳は「古長崎湾」に面する丘陵上（そこからは不知火海が一望できる）に立地している。

5世紀代に比定されている鴨籠古墳も、「古長崎湾」に突き出た丘陵上にある。以上の古墳被葬者の居住・生活の場所は、長崎の地が考えられる。不知火海上交易の北端の要地の一つと考えられる。

城ノ越古墳・迫ノ上古墳・スリバチ山古墳については、古墳時代の海岸線をどの辺りにするかが問題である。かっての「古長崎湾」は今以上に深く北まで湾入していたことが考えられ<sup>24)</sup>、また宇土市側では小字名「塩田」の存在から満潮時には海水の上に乗った河川水が栗崎の付近まで来たことは十分考えられる。<sup>25)</sup>現在でも、栗崎から浦上までの道は使われている。直線距離で約1.2キロ、高低差約50mで、城ノ越古墳はこの道沿いに立地している。スリバチ山古墳・迫ノ上古墳は、この道を眼下に見下ろす丘陵上で不知火海と有明海をみはるかす地点に立地している。中期に位置づけられている宇土市緑川の天神山古墳は、緑川本流（現在の浜戸川）が大きく湾曲した地点に面した丘陵上にある。古墳時代の地形は現在と大きく異なっていたと考えられるが、緑川上流からの水に満潮が重なると現在の緑川の流路より南に潮が来ることは確実であり、当時は有明海に直面した地点であったと考えられる。天神山古墳より南の椿原町に船津という地名があること、そのすぐ北でかつて帆柱が地中から出てきたこともそれを裏付ける。有明海上航路の南端の一つであろう。

仁王塚古墳は、長崎・鴨籠から小曾部へ丘陵越えする道（ここが宇土神山の白山から不知火町塚原へむかって南南東に延びる丘陵の最低鞍部になる。第13図）に面した丘陵上に位置している。現地に立ってみると、松橋・宇土両方を見渡す地点である。また、現地に立つと最低鞍部と水田面の比高差は非常に小さい。ただ、この仁王塚はその立地から考えると②のグループに入れる存在であり、中期・後期では②・③のグルーピングを考え直さないといけないかもしれない。

これらの前方後円墳の立地する地域には、現在では不知火町から宇土にかけてはかなりの平野が存在している。しかし、その多くは近世の干拓によるものであり、古代には海水が満ち引きする潟であった可能性のほうが強いことが、浜田・塩田・浦田・潮入や割のつく地名や現在の地形、さらに緑川流域の近世の逆流水灌漑農業などから推定される。

宇土半島の前方後円墳は、4世紀に県内の他の地域に比べその優位性を示している。しかし、中期以降その地位は低下した感じを受ける。その原因として政治的要因を推定する考え方もあるが、もし宇土半島基部の前期の前方後円墳が不知火海上交通・有明海上交通を結ぶ陸路と

関連するのであれば、推論の積み重ねであるが次のように考へることもできよう。

宇土半島基部で前方後円墳が少ない中期にあって、熊本県下最大級の前方後円墳で中期に位置づけられている天神山古墳が今までの古墳立地地域から離れ有明海に直面する場所に造られること。宇土半島（基部以外）・天草に注目される古墳の築造が中期に始まり、特にその立地から水運と深い関わりをもつと考えられる石障系石室を持つ古墳が、緑川流域から宇土半島を大きく迂回して八代につながる分布を示すこと。<sup>27)</sup> 石室壁の突起ではなく、凝灰岩製の石棺内壁に刀掛状突起を有する古墳は石障系古墳の分布と別の分布を示す可能性が強いこと、さらに氷川地区・八代地区に大きな前方後円墳が築造されはじめることなどから、有明海と不知火海を結ぶルートとして、宇土半島基部陸路経由ではなく宇土半島三角経由氷川・八代海上ルートの発達を読み取ることができないか。石障系の石室を持つ古墳の分布から推定するならば、三角・戸馳島・維和島あたりから氷川・八代に渡るコース、大矢野・天草郡松島から八代へ渡るコースなどが考えられるであろう。

以上、宇土半島基部の前方後円墳の立地を「交通」と関連づけて思いつくままを記してみた。農業だけで歴史を再構築するのではなく、非農業民からの視点も重要であることは最近認識されつつある。特に古代における「交通」のもつ役割は、大きいものであったことは想像にかたくない。以上の推論の正否は別にしても、近接した①②③の地域において3グループないし4グループが、古墳時代前期に前方後円墳をそれぞれ構築したことをどのように理解するのかが今後解明されるべき問題となり、そのためにも古代地形の復元を目指す調査の必要を痛感する。

## 4章 古墳の移築

### 1 移築にいたる経過

1991年3月25日

神の元1号墳の移築保存について不知火町教育委員会から助言を求められ、移築場所に関する会議に参加。

出席者 不知火町教育委員会社会教育課 寺川昌利課長 浦中耕太郎  
不知火町農政課 松永茂課長 古川明生係長 村上伸一  
県宇城事務所耕地課 井村憲雄 山里直子  
県文化課 中岡 畏  
協議結果 不知火町民グラウンド内に古墳を移築することが可能か、不知火町でまず検討する。

1991年4月22日

不知火町町民グラウンド内移築が決定したので、不知火町役場農政課、建設課、不知火町教育委員会、鶴田倉造、庄村巖氏とともに移築場所の候補地2ヶ所を実見する。

1991年4月24日

2ヶ所の内、距離的にも近く標高がほぼ同じ町民グラウンド東側に移築することになった。

### 2 移築作業

1991年5月27日 移築場所の繩張作業

1991年6月11日 移築予定範囲の掘削

1991年6月21日 石室石材の抜き取り（腰石5、袖石2）

石材運搬（古墳周辺にあった石室使用石材と思われるものを含めて24個を移築場所に運搬）

1991年8月2日 腰石（5）、左袖石の復元

1991年8月6日 仕切石（11）、右袖石の復元

1991年8月7日 腰石（5）を推定復元、その他の石を庭園風に設置

玄室内に白砂を敷く。羨道部分から東側に排水パイプ設置

1991年8月8日 写真撮影、移築場所の標高出し

### 3 移築場所・方法（第2図）

移築場所は、町民グラウンド敷地の東側で、原位置の西方約130mである。移築レベルは本来あった標高より1m高くなつた（奥尾床中央仕切石上面の高さで見ると、元のレベル=23.18m、移築後のレベル=24.18m）。なお、発掘調査のレベルは道路建設業者が松橋神社前の三角

点から移動したものを利用し、移築のレベルは移築場所の南約100mの竜頭公園の不知火町図根三角点 I 1 (標高44.77m) を基準にした。主軸方向は、原方角と同じ。

(1) 原位置を保っていた腰石4個・漢道部を構成する立石1個・左右の袖石各1・屍床仕切石(11個)を実測図にしたがって設置。右袖石だけは破損が激しく本来のレベルに復元すると地表に出る部分が少ないので、視覚的に理解できるよう本来のレベルより高く設置した。右屍床仕切り石は、古墳破壊時に南部分が少し下げられたと考えられるので、水平に復元した。屍床については、元のレベルに床面をつくり、その上に奥屍床・右屍床にあった礫を運んで敷いた。

下込め石・裏込め石は、調査日程との関連で移築することはできなかった。また、実測図通りの復元をめざしたが、短期間に移築せざるを得ない状況があり、数センチのずれの出てきたところもある。

(2) 当初、原位置を保っていた石材のみの移築を考えていた。しかし、石室を可能な限り復元した方が見学者の理解を助けること、また移築した場所が傾斜地であるため石室を復元しておかないと腰石のない部分から土が流れ込む懼れがあるので、石室腰石2(左・右各1)、漢道部3(左1、右2)をつくった。古墳周辺にあった石材のみを使用したため適當な大きさの石材がなく、復元に不満を残す所も多かったが妥協せざるをえなかった。

(3) 仕切石は非常にもらくなっていたので、それを保護するために仕切石の少し上の高さまで白砂をいれた。将来、覆い屋などの施設ができれば、白砂を取り除き仕切石・礫床が見学できる状態になるのが望ましい。

(4) 古墳築造に使われた可能性のある石は可能な限り運搬し、移築石室の南側に庭園風に配置した。

なお、不知火町教育委員会に次の事を要望し、そのうち1・2については了解を得ている。

- 1 古墳があった原位置に、標柱を立てる。
- 2 移築場所に、標柱・説明板を設置する。
- 3 覆い屋を建て、遺跡の保護を図る。

また、古墳移築に際して不知火町小曾部の西村造園のご協力があった。

最後に、多くの人々のご教示・ご援助によって報告書出版までこぎつけることができました。宇土市の井上正先生には宇土の地名・歴史について教えていただき、鶴田倉造先生・鶴谷力夫先生には古墳分布調査で力をかしていただきました。両先生の文化財保護に対する熱意と行動力には学ぶところ大ありました。林行敏先生には岩石の鑑定をしていただきました。宇土市教育委員会の高木恭二・木下洋介両氏には発掘の段階から編集作業にいたるまで種々助言をいただき、また松本健郎・島津義昭・西住欣一郎氏をはじめ県文化課の方々から有形無形の支援を受けた。

## 脚注および参考文献

- 1) 富樫卯三郎氏からの連絡。熊本日日新聞は1989年2月27日に報道した。
  - 2) 梅津正倫「曾畠貝塚付近における地形環境の変遷」『曾畠』、1988
  - 3) 北条暉幸・平山恭一・木下洋介『宇土市松山町畠中遺跡出土の甕棺』『宇土市史研究』第2号、1981  
高木恭二「宇土半島基部の弥生資料(1)」『宇土市史研究』第4号、1983
  - 4) 石母田正『日本の古代国家』、1971 「…それぞれのクニ=共同体の内部にまず「官」が成立するのではなく、それら相互の間に、または外団と接触する場にまず「官」が成立することは、前記の首長制の特徴と密接に関連しているのである。…中略…「諸共同体の終る」ところ、その「接触地点」でまず交換が始まるという原則はここでも特徴的である。・」という指摘は示唆的である。
  - 5) ③のグループは、宇土市栗崎のグループと不知火町長崎のグループにわけられる。両地域は、当時は農耕地も少なく、また綾川・白川があるため陸路の重要な地点とはいえないものの、有明海と不知火海を結ぶルートと関連すると考え今回は大きく1グループにした。
  - 6) 道免古墳が破壊される時実見された上田正幸氏の話によると、耳環・頭骨2・鉄刀?が出土し、内部構造は鶴鱗古墳と同じ箱型石室である可能性もある。
  - 7) 井上辰雄『火の国』、1970
  - 8) 立地的に見ると柏原古墳も同時期の築造の可能性があるが現在のところ時期不明。この古墳の周囲と思われる遺構が、古墳東側で焼成によって大きく破壊・露出しており土器が多数散布しているので、規模・時期等をある程度確定できる可能性がある。
  - 9) 高良丘陵上にある古墳を、高良古墳群とした。
  - 10) 宇土市教育委員会『宇土半島基部古墳群』P.196、1987
  - 11)『延喜式』に「肥後國駅馬、大水。江田。坂本。二重。鉤葉。高麗。蓬養。球磨。長崎。豈向。高屋。片野。朽網。佐職。水俣。仁主各五疋。」とある。  
次の表のようにB地点で二股にルートが分かれる時
- A → B → C → D

↓

A → B → E → F → G
- そのルートの記述は、A → B → C → D → E → F → G → の順になるのが自然であり、他の国の延喜式駅馬の比定もそのような順におこなわれている。それに対し木下良氏は、西海道西路のなかで高屋だけ伝馬が設置されていないことを重視され
- A 蓬養（子爵） → B 球磨（限庄） → C 長崎（不知火町長崎） → E 高屋（三角町）

↓

D 豊向（豊野村山崎） → F 片野（八代市） →
- の陸路を推定されている。（『第六節 肥後国』『古代日本の交通路Ⅱ』、1979）
- しかし、史料操作の上からは、延喜式伝馬無より駅馬の記述順を基本とすべきで
- A（蓬養） → B（球磨） → C（長崎）

↓

D（豊向） → E（高屋） → F（片野） →
- として、長崎を陸路の終点にすべきであろう。
- また、坂本・二重・鉤葉を阿蘇への駅路とするならば、江田から二重の間の地点で坂本の比定地を探すことも無意味ではなかろう。
- 12) 木下良「肥後国府の変遷について」『古代文化』第27巻第9号、1975
  - 13) 林 行敏氏の教示。
  - 14) 次の意味で使用した。  
下込め石・腰石の下に置かれた石、腰石の下に差込まれた状態の石  
裏込め石・腰石の底部より上の位置に置かれた石。
  - 15) 簡田信智氏によると、十五社石棺群の第1号石棺は割石を小口積みしたものらしいこと、また2号と3号石棺の中間の地点から古式土器が出土したといふ。  
庄村巖氏によると、4号石棺は当時不知火小学校教諭であった後藤秀喜氏が発掘し、遺物も不知火小学校に保管されていたとのこと。
  - 16) 熊本県教育委員会『熊本県装飾古墳総合調査報告書』、1984

- 17) 熊本県三角町教育委員会『宇土半島古墳群分布調査報告』、1986に、三角地区にみられる古墳は農業を基盤とする内陸部のそれとは異なる性格のものと考えられ、対馬から天草地方にみられる立地と軌を一にするものであるとの指摘があるが、宇土半島東部の高良古墳群もほぼ同様の性格を有すると考えられる。
- 18) 石母田正『日本の古代国家』P.17、1971
- 19) 森 浩一『諸王権の造形』図説 日本の古代 4、1990  
前編・中期の古墳が海上交通の拠点に成立すること、女性と港と古墳のセットでこの地域の向野田古墳に言及されている。
- 20) 3つのルートを考えていた時、立間・花園のグループに前期古墳がないことが気がかりであったが、1991年の宇土市教育委員会の調査でこのグループにも前期の古墳（潤野3号墳）が存在することが明らかになった。宇土市教育委員会 パンフレット『立間古墳群 熊本県宇土市立間町所在の古墳群 潤野2・3号墳、西潤野1・2号墳の調査より』、1991
- 21) 古墳の編年は、高木恭二「2 西部（佐賀・熊本）」『古墳時代の研究 10 地域の古墳 I 西日本』、1990による。
- 22) 高木恭二によると、ギリギス山古墳の石棺蓋などは、不知火町御領潤田768-1の田中寿男氏の自宅に保管。実見したところ、石棺蓋は1m×0.6mのちいさなもので小児用である。
- 23) JRの線路があるところが一番低い部分で、かなり土を埋めて線路を敷設したという話を聞く。また、『不知火町史』には、十五社神社に関して次のような話が記述されている。  
「…昔、土地の人々が天児屋根命御一行を勧請した。一行は八代海を航して、湊山東山麓の現在の地にお着きになった。船の纏（ともづな）をつながれた石は船碇石といつて今も残っている。命のお供をした十五人の神様を祀ったのが十五社さまである。天児屋根命及び残りの神々は、小金丸という船にのって高良瀬溝、一名「オングミ」を通り、柏原に碇泊された。碇泊された処は御輝昭宿である。氏の家屋敷を一名小金丸といっている。船つなぎ石も残っている。…」
- 24) 熊本県立図書館所蔵の近世の地図を参照すると鶴鷺古墳のある丘陵より北まで海で、近世までは潮入りであったことは確実である。また、不知火町長崎の内田鉄男氏の話では、大正時代に麦にあかさび病が発生したので、干拓の種門を開いて海水を入れたところ、潮上の神社近くまで水が入ったとのこと。
- 25) 宇土市の小字名「塙田」・「諒田」の範囲を第13図に記入した。入地町字塙田の標高は2.7m～2.8mで、第13図の標高3m推定ラインの北側近くまで潮入りがあった可能性がある。また、次のような記述もあるので紹介する。  
「…この船場川の上流は、細川御殿裏（もと宇土市新小路町に所在…中間）からずっと不知火村の小曾部までつづいていたのである。小曾部にも木造の堰が造られており、いつも堰番が水の見張りをしているのが見られた。…」光永文熙「船場川今昔」『宇土市史研究』第9集、1988
- 26) 「…逆流水灌漑と称するは、有明海六メートルに及ぶ干溝の差を利用した全国でも珍しい灌漑法である。大潮の潮先に乗った逆水（押水）を取り入れ、これを農業用水に使うもので…後年の宇土郡宇土町・轟村・轟川村・花園村・不知火村…などでは、大なり小なり皆その恩恵に浴し…」井上正「逆流水灌漑と船場川」『宇土市史研究』第9号、1988
- 27) 分布については、河野法子「石障系古墳の一考察」『記後考古』第2号、1982を参考にした。松本健郎氏によると、その他に石障系古墳・またはその可能性があるものとして以下の古墳がある。  
糸島山1号墳、児島崎古墳、鬼塚古墳（以上熊本県三角町教育委員会『宇土半島古墳群分布調査報告』）、1986)、鐵亀塚古墳（山鹿市立博物館、『鐵亀塚古墳はか』、1989)、りゅうがん塚古墳（熊本県城南町教育委員会、1989年調査)、千崎古墳（稚和島所在)、大串古墳（熊本県教育委員会『大見鏡音崎石棺群・大串古墳・要古墳群』、1982)、竹島3号墳（谷口義介「第11章 天草における横穴式石室墳群の展開」『熊本商科大学産業経営研究所叢書17、1990)
- 中尾の図版に、石障系石室を持つ古墳（●印）と無灰岩の石棺内壁に刀掛状突起を持つ古墳（○印）の分布図を載せてるので参考されたい。
- 28) 宇土市教育委員会『ヤンボシ塚古墳・橋崎古墳』、1986
- 29) 律令国家における畿内勢力とその支配下にある地方豪族との関係とは本質的に異なるこの時代、近接した複数グループの地方豪族と大和政權との関係をどう考えるのかが問題となろう。

# 図 版

図版1



航空写真（東上空より）



神の元1号墳遠景（東、不知火町役場屋上より）

## 図版2



神の元1号墳調査前（南より）



神の元1号墳調査前（東より）

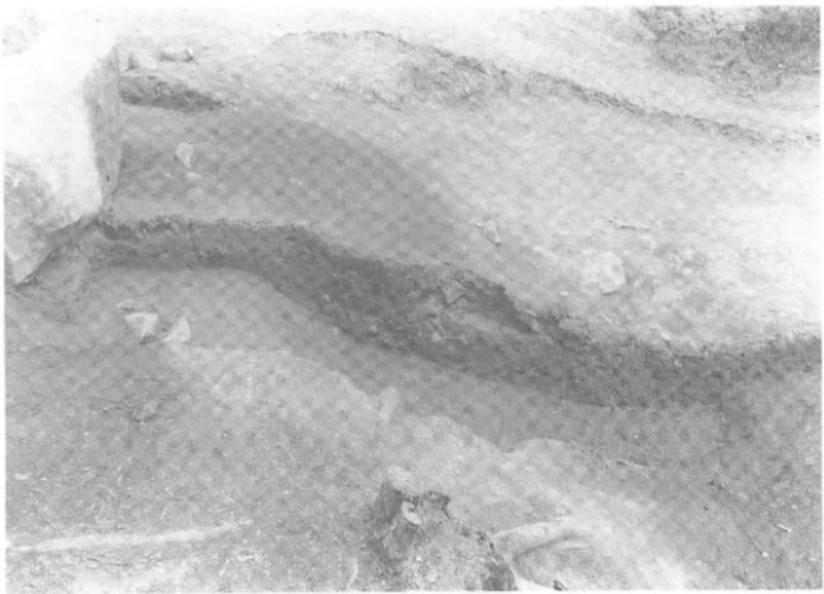
図版3



No.1 トレンチ（石室より）



No.2 トレンチ（石室より）



No.3 トレンチ石室付近（南より）

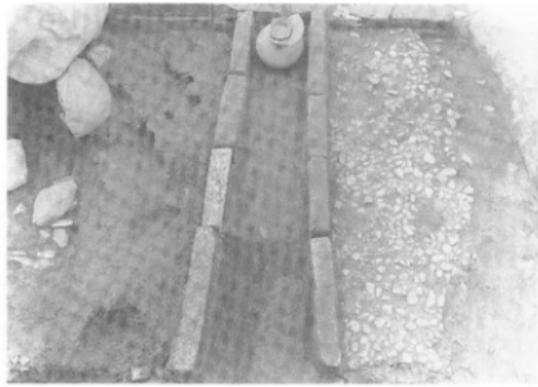
## 図版 4



石室（南より）



奥屁床



左・右屁床（南より）

図版 5

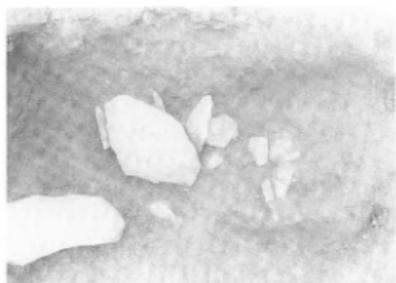


奥壁腰石裏込め石（北より）



右壁腰石裏込め石（北より）

## 図版 6



左壁南腰石下込め石（西より）



左壁南腰石掘り方（西より）



須恵器出土状況



小型短頸壺出土状況

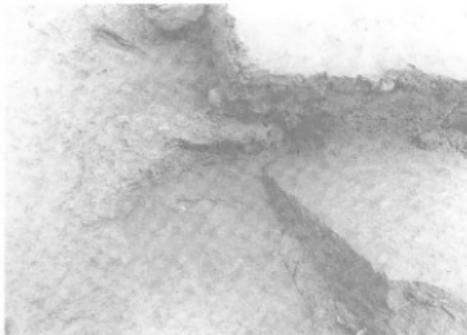


ガラス小玉出土状況



耳環出土状況

図版 7



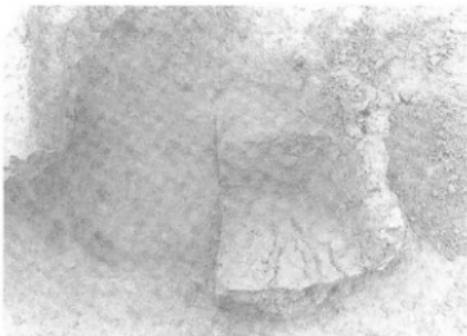
玄室南西部青白色粘土（南より）



玄室北西部青白色粘土（西より）



玄室南東部青白粘土・左右袖石（東より）



右袖石掘り方・青白色粘土（南より）

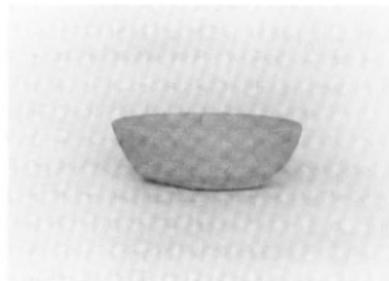
## 図版 8



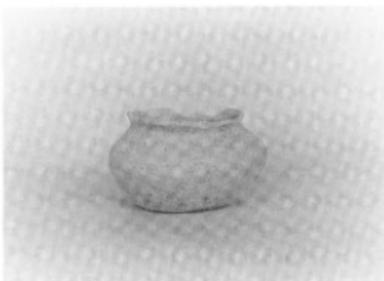
台付広口壺



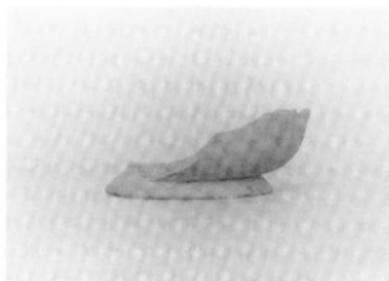
高 坯



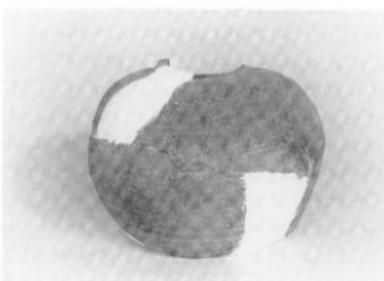
坯



小型短頸壺



高台坯

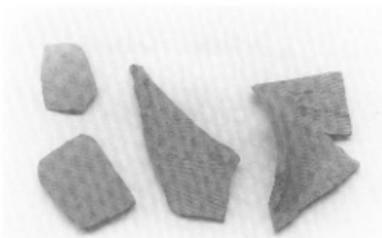


長頸壺

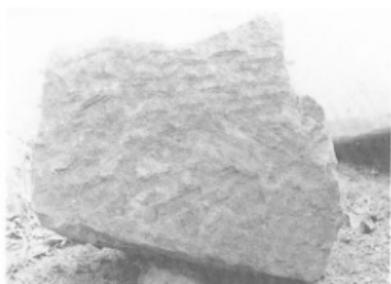
図版 9



耳環・ガラス小玉



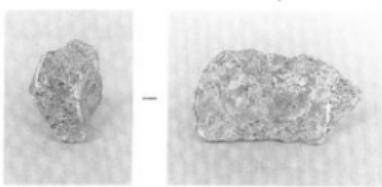
須恵器片



右袖石（玄室側）



左袖石（羨道側）

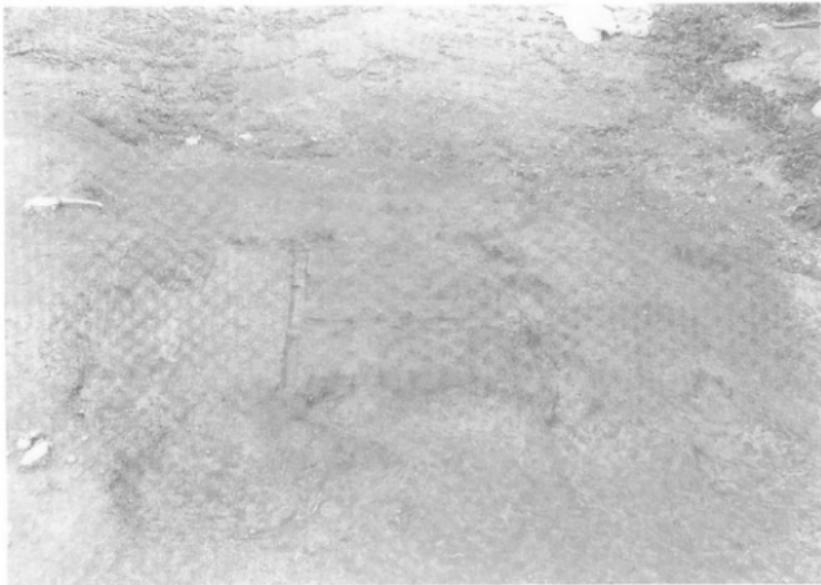


人骨片

## 図版10



石室完掘状態（東より）



石室掘り方（西より）



移築後石室遠景（南より）



移築後石室（南より）

熊本県文化財調査報告書 第122集

神の元 1号墳

1992年 3月31日

編集・発行 熊本県教育委員会

〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷所 コロニー印刷

〒860 熊本市二本木3丁目12-37

03 教委 教文  
② 002

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第122集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：神の元1号墳

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016年3月31日